



## イケケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

### 第 593 回 人類最大の罪は「無関心」

2014.9.7

愛の対極にあるのは憎しみではない、無関心である。  
美の対極にあるのは醜さではない、無関心である。  
知の対極にあるのは無知ではない、それもまた無関心である。  
平和の対極にあるのは戦争ではない、無関心である。  
生の対極にあるのは死ではない、無関心、生と死に対する無関心である。

これは 1986 年にノーベル平和賞を受賞したエリ・ヴィーゼル(ルーマニア出身のアメリカのユダヤ人作家)の言葉である。

最近特に多いのが「無関心」、「無感動」、「無関係」を標榜する三無主義と言われる若者達だ。何につけても「しらけ」ており、何にも参加せず、むやみに休まず、遅刻もせず、ただ何となく出勤して来る。「別に…」「特に…」「そう言われても…」が枕詞で、「私には関係ないから」が口癖になっている。いったい何を目指して生きているのか、何のために働いているのか、何に興味があるのか、皆目分らない。新種の生き物のようで、人間的に違う生物に見えてしかたがない。かのバーナード・ショー(イギリスの作家、ノーベル文学賞受賞者)は「我々の人類に対する最大の罪は、彼らを憎むことなく、無関心であることだ」と断言している。

原因は千差万別、恐らく色々あるだろう。

人から関心を持ってもらえない、特に親兄弟からも無視されるという環境の中で育ったトラウマが、『アスペルガー症候群』等の精神障害を引き起こす…本物の病気かもしれない。人や周りに興味を示さない無関心な人達は、多かれ、少なかれ、自分自身が無関心の対象にされていた経験を持つ。その結果、自分を問題の渦中に置けず、一步下がって世の中批判的に見てしまう。その深層心理は、自分がいても何も変わらない、自分は特別役に立っていない、自分の存在は必要ない…そんな思考に慣れきってしまったのだろう。

そんな彼を変身させるポイントは、彼自身を「無関心の的」にさせない事だと思う。

無関心の彼を嘆き、叱るより褒める事だと思っている。この種のタイプはいくら叱っても「柳に風」、もしくは「暖簾に腕押し」、怒るエネルギーだけが虚しく消費されるだけである。

だから怒るより、褒める機会を増やす必要がある。

一言かける、名前を覚えてあげる、名前と呼んであげる…まずはフレンドリーに接し、「君にいつも関心を持っているよ」というハートを伝えることであろう。

「君の力が必要だ」…そう、思ってもらうことが、彼らへの絶好の治療薬になると思っている。

「そう、簡単にはいかないぜ！」…にやけた、蔑視的目が気になるが、人類最大の罪の一つでも無くしていく、無関心でない人の「使命」であると思っている。